

特集 この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

日本文学者  
早稲田大学特命教授・東京大学名誉教授

ロバート キャンベル 先生



ロバートキャンベル先生（略歴）

- 一九五七年 米国ニューヨーク市生まれ
- 一九八一年 カリフォルニア大学バークレー校卒業
- 一九八四年 ハーバード大学大学院東アジア言語文化学  
科博士課程修了、文学博士
- 一九八五年 九州大学文学部研究生として来日
- 一九九五年 国文学研究資料館助教授
- 二〇〇〇年 東京大学大学院総合文化研究科助教授
- 二〇〇七年 同大学院総合文化研究科教授
- 二〇一四年 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分  
科会教育課程部会教育課程企画特別部会委  
員
- 二〇一五年 同部会言語能力の向上に関する特別チーム  
主査代理
- 二〇一六年 文化芸術立国実現に向けての文化庁アドバ  
イザリーメンバー
- 二〇一七年 日本文化教育交流会館日本語教育分科会委員
- 二〇一八年 国文学研究資料館館長
- 二〇二二年 東京大学名誉教授
- 早稲田大学特命教授・同大学  
国際文学館顧問に就任

※専門は近世・近代の日本文学。特に江戸  
（明治期の漢文学に関連の深い文芸ジャ  
ンル、芸術、メディア、思想など）に関心を  
寄せている。著書は「日本古典と感染症」  
（角川ソフィア文庫）「井上陽水英訳詩  
集」（講談社）「名場面で味わう日本文学  
60選」（徳間書店）「東京百年物語」（岩  
波文庫）等多数。

七月二十六日午後、早稲田大学構内にある「早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）」内のロバートキャンベル先生の研究室に編集部長・副部長がお邪魔し、お話を伺いました。

\*\*\*\*\*  
キャンベル 皆さん、ここは初めてお越しになりましたか。  
編集部 初めてです。こちらは隈研吾さんが設計された建物なんです。

キャンベル そうですね。ゼロからではなくリノベーションですけれども、一九六九年に建った無味乾燥な授業棟だったのを、国際文学館をつくるということで、卒業生で



もあるファーストリテイリングの柳井正さんの財団から浄財をいただいで、スケルトンにしてつくり直していただいたんです。編集部 スケルトンからやり直したんですね。キャンベル 全部スケルトンにはしていないんです。地下一階

から二階までを全部くり抜いて、真ん中を吹き抜けにしてつくっているんですね。入館は予約制ではありませんけれども、皆さんはもう入っちゃったから(笑)……。あとでゆっくり御覧になってください。

編集部 それでは、これから一時間ぐらいお時間をいただいで、お話を伺いたいと思います。

このたびは、大変お忙しい中、貴重なインタビューの機会をいただきまして感謝申し上げます。全国に約九千の公立中学校があり、毎月刊行している機関誌「中学校」の十月号で「この人に聞きたい」という特集を組んでいます。キャンベル先生のこれまでの研究とか御教授されたことから、将来展望を通して、「中学校教育に望むこと」という大きなテーマの中で、四つのことを質問させていただければと思っています。

よろしく願います。

編集部 キャンベル先生は、アメリカで生まれ育って、イギリスにもいらした。非常にグローバルな視点をおもちだと思っっています。

キャンベル イギリスにもフランスにも少しだけいました。

編集部 日本にも来られて、日本文学者として東大や早稲

田大学などで教えてこられたと思いますけれども、今の時代、知識とか暗記の教育ではなくて、思考型というかアウトプット型の基盤になる二十一世紀型の学力というのが日本では求められて、その上で、アメリカやヨーロッパでも提唱されている数理的思考力を重視したSTEM教育に、芸術とか教養的な部分が入ったSTEAM教育がアメリカではどんどん推進されていて、文科省も、日本もそういう視点でやっていくべきだという声を上げています。

STEAM教育というのは教科の枠を超えての大事な学びがあるのではないかと思うのですが、STEMのA、芸術・教養的な分野を日本はどのように学校教育の中で取り入れていけばいいと思っていらいしゃいますか。

キャンベル もとものとSTEMがアメリカでSTEMになったわけですね。日本との違いが非常に顕著だと思えますが、アメリカは中央集権的な教育、州によって、あるいは自治体によって教育制度に大きな違いがあって、文科省の教科書検定のようなシステムは基本的にないんですね。それに加えて、特に公教育は、その地区の財政ベースに応

じて投資される予算が随分異なります。

そのことと、数年前から言われているように、アメリカには構造的な貧富の差というか構造的な特徴が社会にあり、人種、あるいは移民社会資本へのアクセスが著しく異なりますが、教育がその最たるものなんです。それが日本と違う。日本の公教育にも課題はもちろんありますけれども、アクセスから考えると、日本の子供たちは比べ物にならないぐらいに、社会の中で生きていくための力、学力を身に付ける環境にあると理解しています。

年々アメリカの義務教育のレベルが、世界的な基準から下がっていくのを止めないといけないということと、九〇年代あるいは今世紀に入ってから、文・理を超えて情報科学というものが必須の能力ということがあり、それを早く生徒たちに教えないといけない。そのためには、基本的な算数・数学、あるいは自然科学も含めて強化しないといけないということがあります。イノベーションあるいは生産性が年々下がっていくことが見えて、てこ入れをするのにSTEMというものがまずはあったわけですね。

日本でいえば特に理系ですよね。アメリカでは、女子学

生が中二ぐらいまでは同じぐらいの学力で広い学びをするんですけれども、高校に入ると、非常にそれが男性に振れる。そして大学に進学しますと、工学部あるいは理学部などはほとんど男性です。そのバランスを取らないといけない。そうしないと女性の活躍は担保できないということが一つ。

また、経済的に恵まれない、あるいは教育や文化的なものへのアクセスが限られている人たちに対して、誰でも自由に教育を受ける権利は日本と同じようにアメリカにはあるんですけれども、実態としてはそうなっていない。ずっとなっていないのを変えようということ。ですから、社会を変えるものとして、特にSTEM教育というものが推奨されていたと思います。そこにAが入ることによって全てになるわけですが非常に薄く、逆に焦点がぼやけてしまうような気がするんです。公教育を強化してこういうところに入るといいと思いますけれども、全ての教科がそこに入るといいことだと、教育的な戦略としてはどうなのかと思います。

先ほど、それは恐らく超越的な、教科を超えてやってい

くということ、インターディシプリナリー(異専門間教育)な観点もあるんじゃないかとおっしゃったのがSTEMかどうかということはちよつと置いておいて、アメリカの教育の世界でも、それから日本、小中学校においてはどうかということをむしろお聞きしたいんですけれども、高等学校から大学にかけては、既存の分野、様々な知識であると情報とか、整理法を含めた思考法ということにこだわらずに、言ってみればディシプリン(学問分野)が重なって、その中から生まれる新しい知見ということが特に大学の中では非常に強調されています。

私の知人である日本文学の女性の教授に、非常に興味深いデータを見せていただいたんですね。この四年、五年ぐらゐの間に、スタンフォード大学の学生たちが一年次、二年次から専門に上がっていく間にどういう動きがあるかということを示すデータです。例えば、学生は、最初は日本文学に関心があつて日本語を学んでいくわけですが、だんだんと、日本語と自然科学ですとか日本語と全然違うことであるとか、文系にとどまらず域を超えた学びを学生たちが意識的に志向しているんです。幾つかのディシプリ

ンが核としてあって、それをお互いを参照できるようにア  
プローチで教材をつくり、生徒たちに提示するということ  
が、今一八歳、一九歳ぐらいのアメリカの大学生を見てい  
ると、ニーズとしては非常に強く表われている。そして、  
非常に高く評価されているということでもあると思います。

一方で、日本の新しい学習指導要領は、与えられた知識  
を理解して、それを試験で正しく出していくということだ  
けではなく、問いそのものを自ら見いだして、それを調べ、  
そして書き上げる。あるいは、プレゼンテーションするだ  
けではなくて、どのように形にしていくなか、それを生徒た  
ち同士でどのように批評するのか、あるいは評価するの  
かということの一つのものとすることによって、深い学びの  
喜びを生徒たち自身が感得できるようなものを目指して  
います。その大きな手法としては、アクティブ・ラーニング  
というものがあり、それもアメリカで起きていることと非  
常に共通しているんじゃないかなと思います。そして、生  
徒たちには、知的レジリエンスというんでしょうか、知的  
な、しなやかな押し返す力というものを育ててもらおうこ  
とが重要じゃないかなと思います。



古語の中には一三〇〇年間の変化あるいは変異というもの  
があり、書記言語としての日本語を考えると、世界に  
類を見ないほどの多様性があります。

**編集部** 変化がすごいですよね。

**キャンベル** 変化もそうですし、ある時代の中で非常に多  
層的ですね。日本人同士で手紙のやり取りもしますね。白  
文の漢文もありますし、候文のようなものもありますし、  
読み物をするときの通俗文と言われるような文章もありま  
す。建物に例えると、七階建てぐらいの建物があって、書  
き方、書きぶりが、求められる基礎的な知識が異なる。そ

これは社会の鏡なんです。江戸時代は身分制度社会で、一人の人間が幾つもの側面をもつものだという世界観がそもそもあるので、私たち現代人のように、「私はこうです」という同一性的な欲求というのがそれほどないんですね。ですから、ペンネームを変えることによって文体が異なったりするし、目の前にいる人たち、状況、それが言語にそのまま表されている。我々がそれを学ぼうとすると、英語とかフランス語から見たときに、「源氏物語」も「好色一代男」も漢文も現代日本語もみんな等距離に見えたんですね。英語に翻訳すると全く同じ文体になる。そんなはずはないですよ。しかし一〇〇年前に書かれたものと谷崎潤一郎のテキストを、英語で読むと全く同じ文体になるんです。そこを知りたいなと思って、ずぼっと沼にはまっていくと、そこには間違はなくディシプリンというものがああります。三〇〇年前なら三〇〇年前にこの列島で生きていた、そして識字能力が高い物を書く人たちの世界観、どうやって物事を表現していたか——ということを追体験といいますが、同じ土俵に立って物事を見る、文章を読む、読解をする専門的能力がどうしても求められる。まずそこが研究者

としての起点なんです。それは、古典ギリシャ語とか古典ラテン語をマスターするのと同じぐらい、あるいはそれ以上の継続的な学びと訓練とアウトプットをしないといけないんです。

そうすると、自分がいかに苦勞してきたかという話に聞こえるんですけども、申し上げたいのは環境科学と古典日本語、両方ダブルメジャーをした人がいれば非常に面白いことができるということです。一三〇〇年間に積み上げられた自然界あるいは天体、気象状況の緻密な情報、一〇〇年以上のものが積み上げられていても、日本人はほとんど誰もそれをひもといて見ないですね。特に文学者、文学研究者はそういう観点とか手法はないので見ないんですけども、社会課題を解決するかもしれない情報が実は日本の文学あるいは歴史記録、文字記録にはたくさんあるんですね。なので、それを抽出して解析して環境科学的な知見に生かすということは非常に今日的な意味があるのです。大事なのは、その情報をしっかりと研究することだと思うんです。

**編集部** そうすると、新しいものが生まれて新しい発見が

あつて、いろいろなものにつながっていく。

キャンベル つながると思います。

ただ、僕は、応用科学的に、古典が環境科学と結び付くことによつて初めて意味をなすとは思つていません。

今は先ほど申し上げたように電子化が進んでいますし、いろいろなことの橋渡しが分野と分野の間にデータが積み上がつていくに従つてできていますね。ただ、それをうまく橋渡しする棧橋のような能力をもった人材がいません。

大学、高等学校、中学校もそうですけれども、ディシプリンとして教科というものが非常にくつきりと切られているためだと考えられます。

**編集部** 特に日本ははつきりしているんですね。

キャンベル だから、私はこのことに関してはある意味アンビバレント（二律背反）ですね。コアになる、基軸になる一人一人の知識の立っているもの、それを自分で確立させるしかないと思うんです。一番のコアなところはしっかりと身に付ける。つまり、普遍的なものが学びにあつて、それを流していたり希薄にさせたりすることはすべきではないと思います。

小学校や中学校に話を少し戻しますと、例えば英語の運用能力ですとか、国語の表現をする、読解をする、思考を深めるという能力は非常に重要だと思つし、数学も理科も社会も、それぞれの基本的な物事を考えるための手法というものを、学ぶことが重要です。ただ、私の場合は中学校あたりから自覚的に、それらを与えられたりあるいは自分で読んだりして、非常に大切な三年間だつたと思うので、そのバランスというものが大事だと思います。

**編集部** 教科の骨格の部分、芯の部分は大事にきちつと学び、そこからいろいろな学びを掛け合わせて、その中で広がつたり新しいものを発見したり新しい視点で物事を捉えたり、そういう視点が大事になるといふことですか。

キャンベル 生徒には、自分で何かを見付けた、気付いた、昨日でできなかったことが今日できるといふ、成功体験といふとちよつと分かりやす過ぎるかもしれませんが、それを与えるといふか、つかんでもらうことがとても大事だと思つています。

先ほど学習指導要領の話をしましたけれども、そのとき私は中教審のメンバーで、二年半から三年ぐらいつつと検

討して答申をしました。言語習得として、英語教育と国語との間に全く接続面がないんですね。ほとんど別々にある。それは、それぞれの教育的な歴史もありますし、先生たちの訓練ということもあると思うんですけども、もう少しそこを広く捉えたい。私の実感では、日本語の中で考える、書く、読むことと、他言語で物事を思考する、物事を見るということとは、すごくつながっている部分があります。

私は英語が大好きなんです。英語は得意だったんです。英語は何かを表現するということが面白かったですね。日本語を学び始めたとき、だんだんと日本語が読めるようになっていって、いい日本語、練られた奥行きのある日本語を読むことによって、自分の話し言葉が豊かになるということを自覚した時期があったんです。そう感じたときに、英語もそうだと思うんですね。

英語と日本語は分ける必要はもろろあると思うのです。けれども、共通したトピック、例えば、ちょっと前の話ですけれども、「はやぶさ」が戻ってきてそれを解析しているときに、大きなニュースになりました。しかし、そういった共通のテーマを、日本語で一度考えて調べたことを、今

度は英語の授業の中で表現する、文章化する。そのことは、学びのモチベーションになるはず。また、共通するスキルもあるわけですので、言語活用を良くしていくというワーキンググループをつくって、他言語と自国の言語というものの学びを教室の中でどういうふうにつなげたら相乗効果を生み出すのかということ、いろいろヒアリングしたり調べたりして提言したんです。

英語は英語、日本語は日本語としてしっかりとカリキュラムを立てて、時間数もきちっと確保して評価もする一方、それが実はほかの分野とつながっていて、何か共通するよくな、先ほど棧橋という言い方をしましたけれども、学びをつくることによって、もうちょっと広い、なぜ今英語を学ばなければならないのかまで感じさせたい。——私は東大の学生に、一年生の最初に、大学ではどうやって学ぶのか、高校と違うということを経験してもらいます。日本語で何かをまとめるにしても、英語で探してこないとエビデンスが十分に集められない。あるいは日本の事象、現象について何か書こうとすると、どうしても他言語、それはハングルかもしれないし英語かもしれないけれども、



そこに行けると行けないのではまるっきり違うんですね。一つはモチベーションとして、日本のことに関心があつて日本のことをもつと学びたいという学生たちには、だったら日本のことをとことん知るようになっていこうというときに、少なくとも英語を用いて、自分の関心が及ぶ範囲に少しでも関わり得るような領域に自分から片足を踏み込んで、情報であつたり人間交流であつたり、いろいろなことをそこから取り出せるように育つていかないと成功しないと思つたのです。

私は、研究とか学問をするということは、信頼が置ける研究者や成果というものがあつて、それに依拠しながら、しかしそれに疑問をもつ。疑問が見えた、足りない、ちよつと違う、それは補足をしなくてもいいのか、というような疑問から新しいものが、生まれると思つたのです。疑問をそこから生み出して、自分の与えられた環境あ



るいは自分がやりたいことに即して、それを一つの課題にしたり問題にしたりして、こつこつと何かをつくつていくときに、俯瞰できることがとても大切なんです。

パティシエでもいいんですよ。一つのケーキの焼き方はずつと伝えられている自分が働いている店。こういうふう  
にこのケーキはつくる、でも材料が不足していたり、あるいは逆に改良されたり、二〇年前にはなかった果物が今は普通に食べられる。それをちよつと加える。何かを加える、つまりイノベーションをつくつていくということは、自分が何をやっているかということ自分で俯瞰することです。斜め後ろ四〇度ぐらいとよく言いますけれども、自分の手先が見えるような視点というものを自分でつくることはすごく大事で、それを若いときから訓練していないと、なかなか身に付けるのは難しいと思います。そして、それを反復していく、場数を踏む、ということがとても大切だと思つてですね。

私はコロナが始まってから、天災、人災と文学史ということを考えるようになって、『日本古典と感染症』という本を去年出したのですが、そこから、今ちよつと考えて

いるのは食糧のことなんです。飢饉が始まると必ず、時差を置いて感染症が広がるんですね。海外においてもそうですが、非常にはつきりと分かっているんです。

これは当然日本文学の研究ではないのですが、いろいろな分野の研究を読んでいると、例えば天明の飢饉、天保の飢饉に応じてたくさんの人たちが、特に知識人が自分の身銭を切ってサバイバルマニユアルのようなものをつくっているんです。全然野菜も買えないし、穀物が目減りしているほとんど買えなくなっている。そうすると都市民が一番困るわけですね。そのときに、代替食品として何を食べればいいのかとか、逆に何を避けなければいけないのかとか、実際に文献を見ていくと、人々に今の状況を理解させるために、必ずそれが読み物になっています。

**編集部** 文章が残っていたからこそ、こういうことが分析できたりするんですね。

**キャンベル** そのとおりです。ただ、大学で国文学の研究学科があるとすると、こういうことの授業はまずないんですね。日本文学と食糧難のようなもの、環境というものを掛け合わせたものがないんです。

私は文学に軸足を置いている……と言いながら、そういうふうに、ちょっと隙間といますか、分野と分野の間に抜けていて誰も今まで見ていない、意識しないことに目がいけますね。今申し上げたように、例えば食糧難と表現、どうやってそれを人々に表現して救っていくのかということや文学として考えたときに、海外には、例えば東ヨーロッパや中南米の一九世紀以降の文学と社会状況についてのたくさんさんの報告もありますし、小説もあります。そういったものを参照することによって斜め後ろのいろいろなものを相対的に見ることもできます。勉強して学ぶことによって市民生活がしっかりと行えるような大人に生徒たちを育てていく。子供の発達にとって教育というのは非常に重要だと思っただけでも、若いときからいろいろな観点から物事を見て、そして健全な形で物事を疑おうという経験を積ませることが重要だと思います。

**編集部** キャンベル先生は中教審の委員をされていて、それをもとにできた今の学習指導要領が、中学校では今年度実施二年目になります。キャンベル先生たちが御議論されたことが具現化して、今中学校教育が行われているんです。

けれども、中教審で先生がお話しされたり協議されたりして今回の学習指導要領につながっていることの中で、これはとても大事なことであると思っていた部分というのはどんなところですか。

**キャンベル** 今部分的に申し上げたんですけれども、生徒たちになぜ学ぶのかということ、つまり、学ぶことの手応えを与える、自覚してもらおうということですね。それは、他動詞的ということよりも自動詞的といいますか、自ずからそのことを感じ取る、手応えを覚えるという経験を一人一人にでもらう。

**編集部** 学習の中に取り入れるということですか。

**キャンベル** そういうことだと思んです。物を知るということ、つまり、解を練り出す、正解を出していくということはとても重要なことだと思んですね。日本の公教育、今までは詰め込み教育としてかなり否定されている部分があると思んです。

**編集部** そこで完結してしまふ。それでは駄目ですよ。

**キャンベル** 求められなくなっていると思んですね。

今、工業化社会からDXの社会に向けて、自分から隙間

であるとか不足しているところとか劣化しているところがあるのかということを見出して、それぞれの持ち場、それぞれの志に応じてそこにコミットしていく。自分からアクションを起こしていくことができる。してもいいんだよということを生徒たちに伝える。非常に抽象的な言い方になりますけれども、それを一つ、議論を通して非常に強く感じましたね。

**編集部** 日本の昔の、知識を与えたり覚えさせたり教育では、話を聞いているだけで、子供たちが学んだ手応えを実感できないですよ。でも、手応えとは何か。自分が学んだ手応えを実感できた、その学び方というのはどんなものなんですかね。

**キャンベル** 教科によって、あるいは何年生かによってもまた変わると思いますが、あるいは先生たちの工夫もあって、いろいろなやり方がありますね。一つは、自分が知り得たことを、ただ試験で満点になるかならないかとか、高い評価が並んでいて自分は立派な人格だとかいうふうに感じずに、逆に平均的なところだったら自分は平凡な人間だというふうに印象づけられないためにも、学ん

「だことをまとめてほかの生徒たちと共有する。プレゼンテーションであつたりグループワークであつたり、一つのタスクを自分たちで解体して区分けをして問題を調べる」と、作業をどうやって分けるかということ自体が僕は学びだと思っただけですね。苦手な子もいるかもしれないけれども、できるだけそういうふうにしてまとめて伝えること。ディベートじゃなくてもいいと思うんですけども生徒たちが、議論をしてやり取りをして、同じ授業、同じクラスの中で受け止めてフィードバックをするということ、理解したこと、あるいは理解できなかったことも含めて発表し合つたり批評し合つたりすること、これも日本の教室には圧倒的に足りない気がします。

僕はツイッターをよくやつたり、いろいろなSNSをやつたりしているんですけども、コメントとか返信の中には、非常に思考能力が高い人と、全くどうにもならないと思われる人たちの言葉がずっと並んでいるわけです。つまり、建設的というか面白くといいますが、相手を刺激するフィードバックができない人たちがあまりにも多過ぎる。直截的にこれは駄目だとか言うのは公共の空間の中で

はあつていいと思うんですけども、なぜそうなのか、どうすればそこをよくしていけるのか、どういう観点が欠けているかということ、同級生を傷付けるとか傷付けないかとは別の考え方として練習していくことが必要だなと思います。

大学生たちは忖度の固まりなんですよ。本当にお互いを傷付けまいとする。私は、一人が発表した次の週に、その人を除いて全員に、リアクションペーパーのようなものを書かせて、発表者にそのまま渡すんです。自分の名前も書いてあるんですね。本人にそれが渡ると分かった瞬間、よく頑張りました、すごく感心しました、よかつたということとをみんな書くわけですね。

話がちよつとずれますけれども、日本は基本的に批評文化が非常に貧弱なんです。新聞の書評にしても劇評にしても、あるいはいろいろなレストランの、特に料理雑誌などを読んでみると、批評ではなくて紹介なんです。この本は面白い、これは週末に読むのにいいですよとかいうことで、批判的な書評は載らないんですね。根本的にその書物の欠けているところを捉えたりその時代の言論に一石を

投じたりする優れた書評というものはあるんですね。しかし、新聞各紙どこを見てもないんです。そこには評者の名前も載りませんし、誰の本かということも分かりませんし、読者も、それはメディアの問題なのか受け止め方の問題なのか分からないんですけれども、読者が求めているというふうになくとも編集者たちが思っているわけです。いい書評しか載らないんですね。



**編集部** 健全な批判精神というのがヨーロッパとかアメリカにはあるわけじゃないですか。批判そのものもいいか悪いかは別として。

**キャンベル** 今インターネットがあつて、様々な形で通じ合つて、それこそソーシャルネットワークと言われるぐらいに、みんな毎日文字をたたいて作っているんですね。日本の歴史の中で今ほど文字文化というのが栄えた時代はないと思うんです。この日本語がいいとか悪いとか言うこ

とはあまり意味はないと思うんですが、ある現象であつたり言論であつたり人の成果というものを見たときに、おっしゃるように健全な批判といいますか、建設的な批判ができるかできないかということは、単なるフィードバックではなくて、その人の創造性ですとか価値を作り出すことができる根本的な力に関わることだと思つたんですね。批判をすることと自分の仕事として、何かをつくっていくということは分かれているのではなく、一つの同じレベルの中で考えるべきだということがあると思います。なかなか公教育の中で、教室の中では難しいですね。

**編集部** 相手を攻撃しているように捉えられるような……。  
**キャンベル** 攻撃をすることでしつぱ返しが来るか分からないというようなこともあるかもしれない、あるいはカリキュラム・マネジメントの中でいろいろな問題もあるにはあると思うんですけども、その基礎的な能力というのは正当に評価することは難しいのです。

**編集部** 学びの実感があるべきだ、手応えがあるべきだといったときに、ただ知識を受けているばかりでは手応えがない。自分たちでシェアしたりグループワークをしたりプ

レゼンしたり、学びの手応えが出てきたときに、健全な批判精神に係る部分がネックになっていくのは、これから進むべき時代の中では、クリアしていかななくてはならない課題じゃないかと思います。

キャンベル そう思います。一八歳、一九歳の人たちの教育に長く携わっているとところから見ると、最初にサイクルをつくるんです。例えば復興というテーマを一度取り上げたんですね。復興というのは、もちろん震災からの復興もあるんですけども、英語ではレストレーションとかリコンストラクションとかいろいろな言葉がありますが、そもそもいつから歴史の中で復興と呼んでいたのか。復興という制度的な一つの思考、概念枠のようなものが歴史的にいつもあつたわけではないことを分かっている人として、学生たちに、みんな復興、復興と言っているけれども、恐らくみんなが生まれたときから復興あるいは復旧復興というものがあるものだと思う。復旧復興というものは普通なものだと思っただけでも、実はそうではないという話をします。そして、幾つかの事例をまず示して、いろいろな社会や時代、それぞれの関心に応じて、日本のことでもいいので復興の事例を実際に取ってきて、

復興そのものがどのようにそこから見えるのか抽出して、そこで復興学のようなものを一度やっただけですね。

そうすると、みんなクモの子を散らしたように図書館に行ったりインターネットで調べたりするわけですが、そこから一人一人が、あるいはグループをつくって、三つ、四つぐらいの段階を踏んで発表して、先ほども言いましたように、次の週に全ての人が講評を書いて出すという一つのサイクルのようなものをつくるんです。一回ぐらいやるとみんなできるようになって、最初は本当に気を遣いながら講評を書くんですね。それを待っていたかのように、僕は次の週にそれをダイジェスト版にして、こういうパターンで批評を書くことはあるけれども、何がそこから分かるのか、学べるのか、あなたにこれを向けられたときに、気持ちがいいかもしれないけれど、ぬるま湯のような批評をもらって手応えがあるのかとそれを向けられた学生に聞くんですね。彼らは、気持ちよかった、よかった、ほっとしました、という。でも、私は、ほっとしていいのか。手応えを覚え次にそれがエネルギーに変換されていくためには、ほっとするだけでは駄目で、足りないところ、痛い

ころが必要で。あと、発表の発声やしぐさ、身体的なところにも踏み込んでいいよと言っているんです。まず身体的なあるいは精神的な課題がないかということをやつと確認した上で、発表の仕方や、手元ばかり見ていないで目を上げているかどうか、ということも書かせるんですね。

学生は最初は、本当に褒めるんです。こういう褒め方もあるのかというぐらいなんです。二回目、三回目になってくると、だんだんそれが取れていって、本心が出てきます。それが面白い。そしてちよつと待って、それは違うんじゃないかというので反論したりすることもできます。若いときほどその経験ができる。小学校はちよつと分かりませんけれども、中学生ぐらいからは、学んでいる自分が見えるような成長段階にあるとすると、そういう経験は大それたなと思います。

**編集部** あと二つ質問させてもらいたいと思います。

一つは、新しい学習指導要領ができて、四つの評価が三つの評価になって、その三つのうち、特に第三観点と言われている「主体的に学習に取り組む態度」については、こういうふうには評価をしていくとか、こういう見取り

をすることが大事だとか、評価について先生が大切であると考えているところを教えてください。

**キャンベル** 一つの試験であるとか、つまり定量指標として測りにくい観点だと思っただけですね。きつちりと説明責任が果たせるような部分だけではなくて、定性的な部分がありある。ということは主観的な要素がある。私は、それは恐れるべきではないと思います。

一方では、正當にそれを問うということは、主体的に学べるようなカリキュラムをつくり、主体的に学ぶとはどういうことなのか、受動的に学ぶとはどこが違うのかということを考えて区分けをして、共通意識を先生たちがもたないといけない。

**編集部** そういう授業をしていくということですね。

**キャンベル** そうです。一つ一つの授業の中でそれを盛り込むことができるし、それが向いている教科、あるいは教科の中でも、ある段階に来たときに一層主体的に学ぶことがしやすい——最初はいろいろなことを学ばないといけないので、そのことも含めて生徒が主体的に学んでいる。ただ、一生懸命にやっている、宿題もちゃんとやっている

し、授業の中で手を挙げているということも主体的に学んでいる一つの指標だと思うんですが、主体的に学んだことのエビデンスが、それだけでいいのかということはあると思うんですね。

前提のところできちんと構造体をつくらないといけない。よく手を挙げる、指すと打てば響く。ただ、打てば響くような学生たちだけが勉強しているわけではない。主体的に学んでいるわけではないですから、その認識が評価につながっていないんじゃないかと思います。

**編集部** 教員がそういう視点を持って子供たちの授業を見取っていく、そういう力が必要なんですね。

**キャンベル** その足場、主体的な学び、態度ということが発現する具体的なシチュエーションであったり成果というものがあることを考えたりしたときに、それができるといえるような授業をつくって提示しないと、黒板に書きながら一方的に授業をするという従来の在り方では、新しい評価の観点を十分に反映できないんじゃないかなと思います。

先生たちにお聞きしたいんです。従来と異なって、はっきりとした評価がなかなか教員たちにセットにはなりにく

い部分か、特にアクティブ・ラーニングなどについてはあると思うんですけども、どうですか。

**編集部** 今回の学習指導要領の改訂を踏まえ、最終的な目標に向け、どう取り組んでいくかとか、どこまで定着したのかとか、自分の振り返りをしっかりと行わせるようになりました。定期テストのつくりも随分変わってきたと思います。

**キャンベル** 振り返り能力というか、放っておけば前に進むのみという生徒の姿勢だと思うんですけども、二か月前、先学期と比べて、あのとき設けた自分の目標というものに今立っているか、そうでないとすると何が足りなかったかということを考えさせたり言語化させたりするというようなことですか。

**編集部** が増えましたよね。

「チャイムが鳴りました。はい、今日はここでおしまい。」ではなくて、必ずその前に、今日やったところを振り返ってみよう、何ができるようになったかな、何ができないのかな、次どうしたらいいのかな、そういう授業がすごく増えてきていますね。そういうメタ認知能力を子供たちに育



てていくことが「主体的・対話的で深い学び」というところにかかってくるかなと思っています。

**編集部** 先生のお話の中ですごく印象に残ったのが、学ぶことよって物事の景色が変わってくる。一日学校に来て、自分はこういう学びができたとか、得たものがあつたと振り返るのはすごく大事な時間かなと。

**編集部** 最後の質問、よろしいですか。

先生は二〇一八年に御自身の性的指向について公表されましたが、今、日本の社会全体がいろいろなことで動いてきており、変化が生まれてきていると思うんですけども、そういう中で、日本の社会がどうなっていくことが大事だとお考えになりますか。

もう一つは学校教育のことですが、同じように、まず日本の社会全体はどうあるべきか、どういうふうになつていくべきかということ。中学校でも性的指向や性自認で悩んでいる子たちがきつといっぱいいると思う中で、そういう子たちも含めて、学校教育は今後どういうふうに進んでいくべきか、どういうことに留意しながら学校教育を進めるべきか、そういうところをぜひ先生のお立場でお話してください。

キャンベル 性の多様性については、教室とか学校という空間の中で改善できるものではないと思うんですね。社会全体に誰もが幸福を引き算されることなく、与えられてしかるべきいろいろなアクセスであるとか社会に生きる喜びとかリソースとか、そこはきちんと均等に機会があつて、自分の状況であるとか指向に応じて一つ一つの、学校なら学校、会社であれば事業、産業、企業の中に参画することができる。その権利というものは、人権として根本的に非常に重要な、今ますます疑われて危険視されている民主主義社会そのもの、我々の根本をなしているところだと思っ  
んですね。

以前僕が勤めていた東京大学や、研究所の親しい教員ですとか指導学生たちはみんな僕のセクシュアリティについて知っていましたし、隠していたわけではない。家族も高校時代からみんな知っていたし、周りもみんな知っていたんですけども、公共の言論に携わる立場の中でそれに言及しなかったのが、二〇一八年に、あるきっかけがあつてそれをお伝えしたんですね。

そのとき僕が感じたのは、若い子たち、中学生や高校生の声をたくさん聞くことができたんですね。そういう活動

家でもない、学校の先生をしている人が実はゲイだ、実はレズビアンだ、あるいはバイだということがすごく波及があるということは全然予期していなかったんですけども、あつたんですね。ああ、そうかとすごく安心する、可視化される、言語化される。目の前にいるその人の社会的な位相というか立場はセクシユアリティではなくて、本業というのかな、自分がずつとやっていることにある。そして、一つの属性として性的指向とか性自認があるということをして若い人たちが理解した。

そういう中で、例えば一四歳、一五歳ぐらいの子供が自分の親にカミングアウトしないのは、親に心配をかけたくない、悲しませたくないということが日本の場合は圧倒的に多いですね。僕はそれを責めることはできない。そういうふうに言われたときに、曇った表情とか否定的なことを言っただけじゃないということをお母さんには言えないんじゃないかなと思っただけです。子供の安全、幸福を願うことは自然だと思っただけで、子供を願うのは誰しもがそれを願う。子供が不安定な未来を見詰めなければならぬということには「ちょっと待ってよ」というふうになると思っただけです。

ですから、先ほど申し上げようとしたことは、教室の中

で、学校の中ではカミングアウトできる、危険性は極めてあるので、改善しないといけないと思うんですが、親がそのことを知らされたときの焦りであるとか否定感とは社会的な鏡です。社会が実際にそうになっているわけだから、その保護者たちをたしなめたり、それは違うとかいうことを言ったりするより前に社会を変えないといけないと思うんですね。

日本は欧米とは異なる民主主義社会の長い歴史があつて、自分を律する社会としていろいろなルールをつくっていくことに成功しているといえますか、定まったいろいろな方法が日本にあつて、それは重視すべきだと思っただけです。そういうことから考えて、五・六年前までは、私は、セクシユアリティに関しては、アメリカでは最高裁で判決をして一日にして結婚の平等、同性婚というものが二〇一五年に認められたわけですが、日本ではそれはちょっとそぐわないんじゃないかな、もつと話し合つて、草の根といえますか、民間の中から社会空間をつくっていく、トップダウンでつくるということではないんじゃないかなと思っただけです。

今はかなり違うんですね。私が公にカミングアウトした

ことのきっかけとなったのは、二〇一六年、一七年、非常に危険な誤謬というか、間違いに基ついた発言があつたことです。実際に子供たちを傷付けている、そして保護者たちをすぐ不安に、あるいは不安を薄々感じていたことを確定させるようなことが次々と起きていたので、やはりこれは制度を変えないといけないと思いました。

日本では制度は最後に変えればいい、制度設計をいろいろつくっていても、魂がそこにつながつていないと日本では成功しないのかなと思つていました。しかし、やはりルールというものがすごく大事で、ルールを変えない限り親は安心できない。実際に一〇代の子というのは、かなり可変的な、流動的な部分がセクシュアリティに関してはあると思うんですけども、今の社会のルールでは何も基本的な人権が保障されていない。パートナーシップ制度というとてもいいものが東京でできたわけですが、それはお願いベースであつて、家族として財政的な基盤をつくつて子供を育てていくことができるかというところ、日本社会では全くできていないんですね。

そうすると、教室の中で人権教育の一環として、まず、いじめをなくす。セクシュアリティはアブノーマルなこと

ではなくて、人間社会においては古代から、人間だけではなくて動物の世界にも一定数、こういう行動、こういうパターン、在り方はある。これは選択的なものではなくて、癖のようなものではなく、その人が生きていく現実だ、選択した可変的なものではないということを理解できるように、教室の中でできるだけそこを教えて、いじめが少しでも減るようにしていくべきだと思つています。

ただ、それは教育の問題というふうに全部そこに追いやることは違うなと思つています。ただ、いじめというものが学校の中に厳然としてあるわけで、アメリカもそうですけども、日本においても一〇代の子たちの自傷行為が非常に多い。性的マイノリティの自傷行為、それから自殺未遂、悲しいことに自殺も、そうではない子供たちに比べてかなり多いわけですね。ですから、そこは一つの領域として、目の前にいる子供たちを守るためには必須の教えるべきことだと思つています。

もう一つ、そこからちょっと離れた立場から考えると、先生が先ほどおっしゃつたメタ認知能力というものを高めるために、当事者であれ、そうではない生徒であれ、基本的な基礎的な資質としてあるセクシュアリティというもの

がどういふものかということを知る。できれば教室の中でオープンに語り合えるような空間をつくる。特に一〇代、中学校、高校の学生たちにはセクシュアリティは自分は何者であるか、他者が何者であるか、他者に対してどういふ期待があるのか、どういふことがあれば受け入れることができるのかできないのかということでも大切な基本的な領域だと思っうんですね。

ただ、そこは非常にデリケートなものもありますし、保護者たちがそれに対して望むことは、非常に異なるということ、制限はいろいろあると思います。LGBTの社会における、アメリカやヨーロッパ、台湾のように結婚の平等が認められて家族がたくさんつくれている、子供が育てられて、子供がどういふふうに学習しているかということもかなり統計が出ているので、そういうものと、今の日本はどういふ状況にあるのか、どういふ課題があるのかということを知ることは、子供たちにとってはあくチュアルなテーマだと思いますし、近くにいたるけれども自分と違う人の観点から自分を見詰める視点を育むことにつながる学びの機会、セクシュアリティということを学ぶ機会、つまり、世界と対峙していくといふか、異性もそうだし同性もそう

だし、いろいろな人の見方、在り方があるということ、学ぶ、実感するということは、人権の問題とはまた別の意味といひますか、意義もあるんじゃないかと思ひます。

基本的に自分の様々な能力を十全に發揮できるような社会にしていかなひと。絵に描いた餅、理想的な理念的なことだけを教室で伝える、教えるということもちよつとどうかなと思っうんですね。

**編集部** 一人一人が最大限に自分の能力を社会で發揮できることが大事ですよね。そういう社会であるべきだと思っうんです。そういうところからすると、その部分に關しても日本はちよつとまだ閉塞的なところがあります。

**キャンベル** これはセクシュアリティの問題だけではないと思っうんですね。外国から来た人たちの子供——日本に渡つてきて、家族をつくつて二世、三世といふ人たちがいる。その人たちの社会参画といふものがすごくパターン化されていて、それぞれの能力を伸ばしたりするようないがなかなかないし、障害のある人たちの課題もありますし、もつと大きなこととしては、女性の教育と、それを社会参画にどういふふうにつなげていくかといふシステムといふもの。最近、男性の育児休暇といふ動きもあるんですけれ

ども、一人一人のライフステージであったり基礎的な環境であったり、どうやって自分を改善していったり開花させていくかということが——日本ほど環境的に恵まれた国は少ないと思うんです。ですが、実際に個々の人になると、すごく固定していて、なかなか付与された条件から踏み出すことができないんですね。

私の周りには非常に優れた才能をもった女性たちがいて、海外に行くんですね。これは一般的な話で、統計が目の前にあるわけではないんですが、海外に出ていって起業する、あるいは海外の産業に、あるいは研究機関に参加して自分の能力を発揮していく女性たちはたくさんいるんです。それは選択だし、いいと思うんですけれども、もうちょっとそれが日本でできればいい。なぜ、できないのか。完璧にとは言わないんですけども、社会的な、あるいは物としてのインフラがこれほど整っているのに、個々の人の流動性が非常に低い社会というのはちょっと珍しいと思うんですね。

中学校の教育にそれを戻すということが言えるかは分かりませんが、自分を変える、自分が変わることができるといことが生徒たちに伝わるのが大事だなと

思います。

二〇歳ぐらいで初めて日本に留学したときに、イエール大学の著名な経済学の教授が東京にいて、何度かお会いしているいろいろなことを教えていただいたんです。僕はダブルメジャーで経済学と日本文化を両方やっていたんですが、実学か虚学か、どっちに行くかすごく迷っていた時期だったので。そんなに真剣に考えることはなくて、二〇代は何をしてもいいんだよ。変えること、変わることはできるから。ただ、二〇代に何かに打ち込んでやっついていないと、全然違うことに転換しようとしたときにうまくいかない。だから、今は経済学にしても日本文学にしてもどっちでもいいんだよ。二〇代は一生懸命に何かを遊んでいればいい。中途半端でなければ、何かをやっつけてもそれを変えることはできる。失敗しても大丈夫だと言われてすごく楽になったことを覚えていきます。

中学校ぐらいから、転んでも自力で立て直すという立ち直ることができるんだよということが、学ぶことを通じて伝わるといいかなと思います。

**編集部** 最後に、今の中学生に大切にしてもらいたいことなど、メッセージをお願いします。

キャンベル 僕は、自分らしさという言葉があまり好きじゃないんですね。というのは、自分が変わるから。自然に変わることもあり、自分がブレーキをかけて急回転をするということも能力として私たちはもっているわけですから。自分らしさということを使うときに、その自分というものはいい意味でまだでき上がっていないわけですから、僕は六〇代ですけれども、これから自分に投資していろいろなことをやれば転職できるんじゃないかなとずっと思っていたんですね。

実は僕の恩師もそうでした。もう亡くなられましたが、中野三敏先生という方が僕にそれを教えてくれたんです。「キャンベル君、僕は今、国文学の先生をやっているけれども、実は他にも結構向いていることがあって、全然違う仕事をするができるんじゃないかと今まで思っていた」とおっしゃっていた。それは先生が五〇代の後半ぐらいだったんですね。自分のアイデンティティというものをあまり決めつけないほうがいいと思うんです。

僕は、三〇年、四〇年前のことを振り返ったときに、全く想像がつかない日常を送っているんです、失敗したことを含めて。悔いがあったてもいいと思います。最後に振り

返ったときに後悔がないような人生を送りたいなんていうのはうそじゃないかなと思うんです。後悔があっても全然いいと思いますし、自分はあるの人にこういうことをしてあげられた、誰かを育てたとか何かを作ったとかいう良かったこと、できなかったことも含めて人生だと思います。むしろ、長い人生の中でどういふうに自分が変容していくか、積極的に自分の変容に参加していく。くさびを打ち込んだり、あるいは逆に身を引いたりするということを自覚して、人を助けるためにもできるだけ自律的に生きることが大事だと思います。

子供の時分から完璧に何かを達成していく、悔いが残らないように生きるということが生きることではなく、一〇代かもしれない、二〇代かもしれない、五〇代かもしれない、急カーブを迎えたときに、しなやかに押し返す、能動的に押し返したりすることができるように育ててほしいし、日々を送ってほしいなと思います。

**編集部** 一時間というお約束が、お話がとても楽しく、たぬになつて、どんどん弾んでしまいました。長時間ありがとうございました。